

リ・モンスター
Re:Monster

金斬兇狐
KaneKiri Kogitsune

姉妹さん(姉)

裁縫と料理が得意。
巨乳で右目にほくろがある。

姉妹さん(妹)

裁縫と料理が得意。
貧乳で左目にほくろがある。

赤髪ショート

赤髪で子犬のような可愛い系の女の子。
冒険者組合《弱者の剣》所属の新米冒険者。

錬金術士さん

知的なクール系美人。
錬金術を操り、マジックアイテムを作ることができる。

鍛冶師さん

ほんわかとした雰囲気を持つ癒し系。
武器・道具作りが得意。

ゴブ吉

ゴブ朗の仲間その1。
棍棒や斧など、重量級の武器を得意とする。

ゴブ江

ゴブ朗の仲間その3。
宝石のように美しい精霊石の採取が趣味。

ゴブ美

ゴブ朗の仲間その2。
投石や弓など、遠距離攻撃を得意とする。

ゴブ朗

ストーカーに刺され、ゴブリンに転生した主人公。
【吸喰能力】によって、喰えば喰うほど強くなる。

Main Characters

主な登場人物

《二日目》

事実は小説よりも奇なり、という言葉がある。

確か大昔の詩人の言葉だったと思う。うろ覚えなのでそれが本当かどうかはともかく、俺は今まさにその言葉が意味する『世の中の実際の出来事は、作られた小説よりもかえって不思議で波乱に富んだものであるということ』を体感する事になった。

などと、唐突に言っても何を言っているのか分かるはずもないだろうから、最初に現状の説明をしたと思う。

どうやら俺は妹的存在兼ストーカーにナイフで刺されて殺害——つまり刺殺され、そして転生したらしい。

いや、転生とか冗談で言っている訳ではない。だから俺を変人だと思わないでもいい。ゆっくりと、順を追って説明していこう。

というか混乱しすぎて逆に落ちついている風になっている俺の精神衛生上、流れを客観視しながら

ら語らないと暴れてしまいそうなので、文句は俺の話を聞き終わった後で、という方向で一先ず納得してもらいたい。

えーと、そうだな、まずは俺の名前から。俺の以前の名前は伴杭ともくいかなた彼方だったが、現在は転生しているの、一応「名無し」としておこう。

で、俺の記憶違いや妄想——そうだったらどれ程良かったか——でなければ、今日の仕事が終わった後、同期で同い年の同僚——霧壺真弓きりつばまゆみに飲み誘われた。

霧壺は最高位の【念動能力者サイコキネ】で、俺とはよく相棒パディとなつて仕事をする戦友の一人だ。霧壺の性別は女で、体型も出る所は出ているし引つ込む所は引つ込んでいるし、御世辞抜きに言っても美人の部類に入るだろう。

そんな霧壺の誘いを断る理由はあの時の俺には特になく、俺達は居酒屋を幾つか巡って酒を飲んで行った。

そして霧壺はアルコールに弱いくせに明日が休みという事で夜遅くまで飲んだ結果、案の定グデングデンに酔っぱらって一人で家に帰れなくなった。

顔を林檎のように真っ赤にして呂律の回らない、一人で正常に歩く事もできない泥酔状態の霧壺を居酒屋に放置してしまうと、周囲の物陰でコチラの様子を窺うかがっていた少々柄の悪い輩に何処かに連れて行かれる可能性が非常に高く、仕方なく俺はその時飲んでいた居酒屋からほど近かった俺の家まで霧壺を運ぶ事にした。

この判断は別に霧壺の事だけを考えて決めた訳ではない。

霧壺は寝ていても自分に害なす外敵を察知できるので、襲われれば無意識の内に最高位の【念動能力者】として行使できる最大級の【念動能力】を行使し、霧壺を襲った男衆の肉体を一瞬で数十の部品に解体してしまうと、【未来予知フューチャー】できたからだ。

泥酔した女性を襲う奴等がどうなろうと俺としては知った事ではないが、あえてそうさせる必要性はない。事後処理が面倒だから、という部分が個人的には圧倒的に大きいのだが。

それはさて置き、会計を済ませた後、俺は霧壺を横から膝裏と背中に手をまわして抱きあげて——お姫様抱っこ、と言えば分かり易いか——店を出た。霧壺の身体は予想以上に軽く、普段から肉体を鍛えていた俺は大した疲労を感じる事無く家に到着した。

体内のナノマシンから生体データを送信、玄関のロックと防衛機構を解除して家に入り、俺は腕の中で半分寝ていた霧壺をベッドにポーイと物のように放り投げ、グギユウ、と変な音を聞いた。

そして昔からアルコール大好きで体質的になかなか酔えない俺は、居酒屋を数軒回った程度ではまだまだ飲み足りなかったの、月一の満月を見上げながらの独り酒でもするか、と思いながら冷蔵庫を開けた。

そこで俺は、普段なら冷蔵庫の一フロア全てを支配していたビールやチュウハイなど多種多様な酒類が全て無い事に気が付いた。

丁度昨日蓄えを飲み干し、今日霧壺に誘われなければ大量に買い込むつもりだったのである。そ

れをあの瞬間まですっかり失念していた。

蓄えが無いのならグッと欲望を堪えて我慢すればよかったのかもしれないが、しかしあの時の満月は非常に美しく、それを見上げながら飲む酒は最高だろうな、としか思えなかったのだ。

だから『グッと堪えて酒を我慢する』という選択肢を選ばなかった俺は、家の近くにある二十四時間営業しているコンビニに出向き、ビール五本とツマミを少々買ってから帰路についた。

もう直ぐ夏が来るとはいえ夜はまだまだ肌寒く、しかしそれだけに澄んだ夜空に浮かぶ満月は美しかったのを覚えている。

薄らと月を隠す雲もまたなかなかいい塩梅で、ああ、今夜の月見酒はより一層美味いだろうな、といった感じで月見酒に思いを馳せていると、俺は夜道を照らす街灯の下で、ポツリと佇む一人の美少女に気が付いた。美少女は、見知った顔である。

と言うか彼女は、世間一般で言う所のストーカーだった。

ストーカーの名前は桐嶺葵きりみねあおいと言い、一応、現役的女子大生。歳は俺の五つ下の二十歳はたち。

アオイと俺との馴れ初めを簡単に語れば、俺が高三の時に十五、六歳ぐらいの金髪ピアスな二人組の不良に絡まれていた美少女——当時十二、三歳だったアオイを見つけ、助けた事から縁ができた。いや、助けたと言うのは間違いではないが、正確ではない。

今とは比べ物にならないほど臆病者チキンだった当時の俺は、自分よりも年下とはいえ頭髪を染めてピアスやら着崩した改造制服やら時代錯誤で明らかに不良な二人組を相手に、知りもしない初めて見

る少女を護るために闘う、なんて事をするはずは無かった。

情けないが、普段ならば周囲の人間のように少女アオイに同情の視線を送りながら、ただ見て見ぬふりをして通り過ぎた事だろう。

当時は他人と殴り合いの喧嘩なんてした事も無かったし、霧壺のように【念動能力サイコキネシス】を代表とする【ESP能力Ⅱ超能力】に覚醒していなかった俺は、そそくさと逃げる筈だった。

そう、普段ならば。

しかしながら、幸か不幸かで言えば恐らくは不幸な事に、当時の俺は銀河的な大企業アヴァロン社の傘下にあたる軍事関係の中小企業で働いていた軍人で兵器オタクな伯父の馬道ばどう憧城しょうじょうから、誕生日プレゼントとして受け取った護身の軍用スタン警棒を持っていたのである。

何故そんな物騒なモノを持っていたのかというと、どれ程の威力があるのか気になっていたのだから自分で試す勇氣は無かったので使う事無く部屋に飾ったままだったそれを、伯父と同じ兵器オタクな友人の一人が『軍用スタン警棒が見たい、持ってきてくれ』とメールしてきたので見せに行く途中だったからだ。

だから当時の俺は、バッグの中から取り出したその軍用スタン警棒を二人組の不良に使用した。コチラに気が付いていなかったし、『不良二人組から美少女を救出する』という大義名分があったので、かなり軽い気持ちで行ったのは覚えている。

後ろからバチバチとやりました、激しく痙攣して口から蟹のような泡を吹いた不良には心底驚き

ました、パニックになって助けた美少女^{アオイ}の手を無意識の内に引いて現場から逃げました。

振り返って思うが、あの頃は本当に若かった。などというのはさて置き、こんな流れで俺は好奇心と出来心から不良を実験台にした“ついで”にアオイを助けたのである。

そしてその後月日が過ぎて紆余曲折あった後に、アオイはストーカーになってしまった。

いや、俺が今の職場に就職——つまり高校を卒業——するまでの出逢ってから数ヶ月はそこまで酷くなかった、と思う。

だが、就職してからは出張先である他の惑星にまで追っかけてくるのは如何なものかと思うし、物陰に隠れながら追跡したりせずに普通に話しかけてくればいいのに、いやそもそも私生活を監視するなど言いたい。

まあ、いい。こちら辺はまだ理解できなくていい。詳しくは追々語るかもしれないので今は置いて、話を戻す。

酒を買った帰り路で、俺はアオイと出会った。

遭遇したと言ってもいいのかもしれない。

街灯にその姿を照らし出されながら、俯き、普段の子犬を彷彿とさせる元気一杯な姿からは考えられない程に黒いオーラを発散していたアオイを前に、俺は首を傾げた。

見つけた時点で変だとは気が付いていた。いたが、ストーカー行為を繰り返すとはいえアオイは俺にとつて妹のような存在——だから強く突き放せていないのだが——でもある為、俺は心配にな

り、声をかけた。

だが返事は無かった。アオイは俯いたままで、その表情を窺う事はできなかった。

それに表現できぬ多大な不安を抱えつつ、俺はその理由を知るべくアオイに近づいて声を出そうとした瞬間、ブスリと、腹をシースナイフで深く突き刺された。

グリツと手首を捻る事で回転した刃が内臓を抉^{えぐ}る激痛を感じたが、その時はまだ再生治療を施せば傷一つなく治る程度の怪我だっただろう。使用されたのが平平凡凡なただの金属の塊でしか無いシースナイフだったのならば、俺だつて抵抗して簡単に殺される事は無かった。

しかしアオイが使用したのはSAKUMA重工製Bランク雷性付与式小刀【^ネ寧々^{カリ}狸理】と呼ばれる、皮肉な事に伯父が勤めている会社が売っているシロモノだった。

【寧々狸理】について分かり易く説明すれば、高性能スタンガンと幾つかの能力を搭載した単分子カッターだ。

チェーンソーのように刃の部分に幾千と取り付けられた極小の刃が超高速で動く事で切れ味を増大させるだけでなく、刀身全体を網羅した液体管^{チューブ}の中を流れる液体状のナノマシンによって物質を切断する最適の角度を自動で調節してくれる近接装備の一種。そして刺した相手の内臓を焼く程の大電流を流す、軍人も使用している様な一品だ。

なんでそんなモノをアオイが持っていたかは、考える時間さえなかった俺には分からない。しかしアオイは現にそれを持っていて、俺は身動きできない間に押し倒されて星空を目撃した。

その後は一方的だった。

アオイが振り下ろすシースナイフの刃が、俺の胴体を何度も突き刺し決っていく。

執拗に何度も突かれ、混乱して訳が分からなくなっていた俺は口から尋常じゃない量の血を吐き出した。ナイフが刺さる度に鮮血が飛び散り、肉や骨がギャリギャリと高速で動く刃によって切り裂かれていくのを感じ、臓腑がズタズタにされていくのを知覚した。

混乱の中、道路に押し倒した俺の上で馬乗りになったアオイの全身を俺の血が赤く染めていく様を、何処か『幻想的だ』と思っていたのだが、冷静な判断力はあの時完全に無くなっていたのだろう。

それにしても危険事が付き纏う職業柄、俺は強化手術を受ける事で人間を超えた人間——
強化人間になっていたのだが、一般人なはずのアオイにああも呆気なく殺されたのはどういう事だ？ いや、シースナイフの性能が凄いのを身をもって知っているが、不意打ちの一撃を入れたとはいえ、強化人間だった俺の体勢を一般人な筈のアオイが崩す事は可能なのか？ 大電流で動けなかったから……いや本当にそうなのか？

何故——ああ、ダメだ、ダメだ。

俺の血に濡れるアオイの姿が印象的過ぎて、あの時の詳細が思い出せない。

……まあ、いい。とにかく俺は殺された。アオイに刺殺されたのだ。

俺は再生治療でさえ治せない様な致命傷を受けた。最後に見た光景が眼球に迫る剣尖^{けんせん}だったので、唯一再生不可能な器官である“脳”をグチャグチャにされ、完全に死亡したのは間違いない。

ドブリと頭蓋と脳を切り裂かれたような感覚を最後に、俺の意識は、闇に溶けたのだから。俺は間違いない、あの時に一度死んだのだ。

しかしながら話はそれで終わっていない。終わっていたら転生とか言い出さない。

一度は闇に溶けた筈の俺の意識は、気が付けば何ら変わる事無く確固たる個の存在として在ったのだ。意識を失う前に、死んだと確信が持てる光景を記憶しているのだが、死んではいなかったのか？ 俺らしくない事だが、酔って夢でも見たのか？ という考えが一瞬脳裏を過った。

しかし、否、それは違うと反射的に答えが出た。

確かに俺は殺された。胸を切り裂いた刃の冷たさを、全身を駆け巡って臓腑を焼く大電流の痛みを確かに覚えていて。あれは絶対に錯覚では無い。致死に至るダメージを、俺は確実にアオイから与えられた。

だが生きている。今もこうして思考できているのがその証拠だ。

何故だ、理由を知りたい。何がどうなっているのか、知りたくて堪^{たま}らない。そう考えた俺は、やけに重い瞼^{まぶた}を開けて、そしてそれを見た。見てしまったのだ。

俺を覗きこむ、緑色の肌をした醜悪極まりない顔を。

それが、俺が転生したのだらうと思う事となった、思い知らされてしまった決め手である。

ああ……と。すまん、なんか急に眠くなったので、また、明日……

死の間では無く、精神的な疲れによって生じた眠りの揺り籠に揺られて、俺の意識は落ちていった。

《二日目》

パチリと目を覚ます。

即座に覚醒した意識は情報を少しでも多く収集すべきだと判断し、瞼を開けた事で晒された二つの眼球で周囲を見回す。現状がどうなっているのかを知る為に、今できる最善を尽くした。

何故か頭が思う様に動かなかったため、それほど多くの事は分からなかったが、それでも大事な事柄は把握できた。

どうやら本当に、残念極まりない事だけれど、転生とかの話は、やはり酔っぱらった末の夢では無かったようだ。もしかしたら、という淡い希望はココで潰えた事になる。

今現在俺が居るのは、洞窟の中らしい。ゴツゴツとした洞窟の表面からは手が加えられた痕跡は見受けられず、自然にできたモノの可能性が非常に高い。それに俺の上に毛布のように載っているボロボロの感触がまた最悪だった。ゴワゴワしていて、ハッキリ言って汚い。酷い悪臭もして、鼻が曲がりそうだ。それから背中を感じる土の感触が不快でかなり気になるし、小石が肌に食い込んでちよつと痛い。

などというのは、ハッキリ言ってもいい事柄だったりする。

重要なのはココからだ。

俺の周囲には申し訳程度の布を纏っているが、殆ど全裸といって差し支えない格好でグースカと

寝息を立てる、尖った耳に驚鼻^{わし}で緑色の肌をした醜悪な面の小人が多数居た。見える範囲ではその数は約三十。

そしてその約三十の内、二十ほどが人間の赤ん坊のようなサイズだった。周囲の小人達はその外見から所謂小鬼^{ゴブリン}という存在ではないだろうか、と俺は判断した。

そう、これが、昨日俺が転生したと思った決め手である。

それに自分の手を動かして掲げて見れば、そこにあるのは周囲のゴブリンと同じ緑色をした肌の小さな小さな赤ちゃんのような腕、細い五指から伸びた鋭く尖った黒い爪と、明らかに人外の物だというのも大きい。

自分の腕がそうなっていて、周囲にはゴブリンの群れ。人間なら襲われているだろうに、何も無い。それどころか、守られている感覚すらある。これこそ確固たる証明ではないだろうか。

どうやら俺は、ただの人間からESP能力者に進化し、さらに手術によって強化人間にまでレベルアップした末に、人間以下のゴブリンにまでランクダウンしてしまったようだ。

ちよつと本気で泣いた。

身体が思う様に動かないのは、恐らく産まれたてだからだろう。つまり今の俺は赤ちゃんゴブリンだという事だ。だから今日はゴブリンの子供らしく、寝て過ごした。

一応言っておくが、これは決して現実逃避デハナイ。

《三日目》

転生してしまったのは俺にはどうする事もできないから仕方ないと諦める事にして、せっかく得た二度目の生を今度こそ力の限り生き抜こうと決意した。

思考の切り替えの早さは、以前の職場では必須なスキルだったからな。生・き・汚・さもあそこで覚えたし。

それにしても、どうやらゴ布林という種は予想以上に成長が早いらしい。

生まれてから三日目なのだが、寝て起きたら身体が急激に大きくなっていった。寝る前が赤ん坊サイズだったのに対し、現在では小学校低学年サイズなのだ。

いやしかしそれにしても、転生前より遥かに弱い肉体ではあるのだが、今までが嘘のように身体に力が漲り、立ち上がれるばかりかそれなりの速度で走れるようになったというのは、何と嬉しい事か。

思わずはしゃいでしまった。大人げないが、自由に動けないというのは短時間でもストレスが溜まって仕方が無かった。

まあ、この程度の事は生まれた瞬間から熾烈な生存競争を繰り広げたりするこの世界の自然界ではさして珍しい事でも無いだろう。

人間などの文明を築いた知的生命体は外敵に襲われる心配が少ないから『ゆっくりと成長する』

という選択肢が採れるが、弱肉強食の自然界で暮らすゴ布林などの種は成長が早くなければ子孫を残せないに違いない。

まあそれはどうでもいいことだと切り捨てて。

自分で動けるようになったので、今日は自分の身体がどんな事ができてどんな事ができないのか知るために費やした。この身体にある程度馴染むまで動き続けて、ぐっすりと深い眠りに落ちる。

とりあえず寝所の快適化を要求したい。

《四日目》

ゴ布林に転生し、動けるようになって初めて狩りに出かけた。

と言うか、働かざる者食うべからず、みたいなノリで、俺の様に産まれたばかりのゴ布林達に栄養たっぷりの丸々と太った芋虫みたいなモノ——いや、案外美味いんだこれが——をくれていた世話役のゴ布林達が『お前等はコレから自分の飯は自分で獲らなくてはならない、俺達も通った道だ諦めてくれ』などと言出し、配給制度がなくなったので仕方なくだ。

生後四日目にして自分の食料を求めて狩猟に赴くのだから、自然界って厳しいなあと実感させられる。

そんなこんなで、流石に一人——それとも一ゴブと数えるべきか、それが問題だ——では難しいと思うので、虚言甘言を駆使して獲得した友達兼捨て駒であるゴブ吉くんとのパディーで森を散策。

この世界のゴ布林って、基本莫迦らしい。騙す方としては楽でいいから問題は無い。

ああ、そうそう。ゴブリンの繁殖って、同族同士でも勿論できるんだけど子供が産まれる確率がやや低いという理由から、基本的にはどこから攫ってきた人間の女性／雌を犯して孕まして、事が判明している。

これは興味本位で寝所になっている洞窟の最奥に行ってみた結果、宝物庫——と言う名のガラタ置き場。錆びた剣や木片など色々使えそうなもの落ちていたが、今の俺は持ち出す事を許されていない——の横にある薄暗い一室にて、ボロ布を申し訳程度に装備しただけのほぼ全裸な数人の女性、全身を穢す白濁した液体を拭う事も無く虚ろで生気の抜けた、まさに死んだ魚のような目をしていた事から知った事実である。ちなみに、美醜あったが、ゴ布林よりは全員マシなレベル。美の子は他よりも酷い有り様だったとだけ——

全員何処から攫われてきたという事は簡単に推察でき、どうにかしてやりたいとは偽善心から思いはしたが、今の俺の力ではどうする事もできないのは分かり過ぎるほど分かっているので『南無』と合掌してから祈っておく。ただの気休めでしか無いが。

多分、誰かが今の俺の母親なんだろうなあー、と思ったけど軽く鬱になりそうなので意識的に考えないようにしている。だからこの話はココまでにしておこう、お互いの為に。

洞窟の外に広がる森の中、初のハンティングは俺の指示通りに動いたゴブ吉くんとの関係プレー

によって無事に成功。

やっぱり一人よりも二人だよなと一人で納得しつつ、しかし残念な事に獲物を勝手に喰おうとしたゴブ吉くんに対して、上下関係を心身にすり込む為に木の棒で全身の骨が折れない程度に打ち据え、そこら辺に転がす。

今後の為を思えば仕方が無い作業を終えてから、俺は獲物の解体作業に移行した。

狩猟の初成果となった栄えある獲物は、茶色い毛皮の野兎、の額に二〇センチ程の一角を生やした何かだ。取りあえず今回の獲物は見た目から“ホーンラビット”と呼ぶ事にして、その額に生えた一角を根元からポキリと圧し折る。

この大きさだと人間の時では小さすぎたかもしれないが、ゴ布林となった事で遥かに小さくなってしまった体軀には丁度いい。扱いは刺突剣のように、斬るのではなく突き刺すのがベストだろう。

「ゴブ朗は“一角獣の角（小）”を手に入れた!!」

ホーンラビットの角を得た瞬間、何処かでなんかアナウンスが響いた気がしないでも無いが、きつと気のせいだろう。

ちなみに今の俺の名前はゴブ朗である。初めて目を開けた時に見たゴ布林が名付けた名前であ



る。ゴブ朗、という名は甚だ不本意ではあるが、以前の名を今の身体では使いたくないので黙認している。諦めて肝心だ。

愚痴はさて置き、角という凶器を獲得し、ついでに毛皮も剥はごうとしたんだけどやっぱり角で剥ぐのはかなり困難だった。相応の時間を浪費すればできただろうが、得られるのは不格好な皮になるだろうし、涎をダラダラと垂らして醜悪な面をさらに酷くさせつつやけにつぶらな瞳でジッと見つめてくるゴブ吉くんの姿に流石に心が痛むと言うか、短時間だけ頑張ってみたけど最終的には剥ぐのが面倒になったのでホーンラビットはゴブ吉くんと半分に分けて毛皮も一緒にムシャムシャと食べた。

手頃な武器を手に入れたり、新鮮な肉を食べたりと、実に有意義な1日だった。しかしそれにしても久しぶりの肉は美味かった。謎の虫も悪くは無かったけど、やっぱり肉だよ。

《五日目》

今日も生きるためにハンティングに出かける。

上下関係をハッキリと理解させているゴブ吉くんは俺の指示通りに素早く動き、前日の経験もあってかすぐに獲物を得られた。

獲物は昨日と同じホーンラビットだったが、昨日のよりも二回りはデカイ大物だったりする。

今現在のゴブ吉くんの得物である木の棒だけだと少々危なかったかもしれないが、俺の得物は昨

日のホーンラビットから得た角だ。そしてその角が想像以上の効果を發揮したのである。

ゴブ吉くんが注意を引き付けている内に背後から接近した俺はグサリ、と角で脊髄を砕いて心臓を突き抉った。少々荒っぽい使い方をしたからか角の先端がちよっと欠けてしまったが、今回の獲物の角でチャラどころかお釣りがくるほどの戦果だったので気にならない。

思わず『角最強伝説』などと言っていた。

ゴブ吉くんの純粋な視線に気が付き、照れくさを隠す為殺したホーンラビットは前日と同じようにベキリ、と角を根元から圧し折る。

「ゴブ朗は「一角獣の角（中）」を手に入れた!!」

再び何処ぞからアナウンスが流れた気がした。

が、まだこの世界の事は良く分からないので俺は考える事を放棄し、コッチを見つめてくるゴブ吉くんと戦果を山分けする事に。

ポリポリムシヤムシヤと肉や骨をかみ砕き、ゴクリと嚥下して、身体全体に漲る生命の鼓動を感じてから、俺は昨日そうかもしれないと思っていた事柄が事実であつたと確信した。

【能力名】^{アビリティ}【脱兎】^{エスケープ}のラーニング完了」

どうやら俺は転生前のESP能力【吸喰能力】^{アブソブション}を持ったままゴブリンに転生したらしいのだ。つまり能力を継承してニューゲームって所か。スタートの時点で酷くマイナスだが。

ちなみにESP能力とは数世紀も前に人類が宇宙に進出した頃より、千人に一人の確率で生まれるようになった【進化した人類】と言うべき【超能力者】が持つ【超能力＝ESP】の事だ。

ただ進化した人類と言っているが、その進化は一代限りである事が多く、ESP能力者の両親の下にESP能力者が必ず生まれる、なんて事は無い。

確率は他よりも高いのは事実だが、不思議な事に絶対ではない。

とはいえ現在は宇宙人と接触し、普通に共生している時代だったので、大昔と違いESP能力者は迫害される事も無く、能力はただの個性として認識されている。もちろん能力を抑制する装置が安価で市販されていた事も大きいだろう。

それで本題だが、俺のESP能力【吸喰能力】^{アブソブション}は、【接触感應能力】^{サイコメトリイ}や【念動能力】^{サイコキネシス}、【瞬間移動能力】^{テレポーション}などといったかなりメジャーで一般的な能力とはかけ離れている。

簡単に言えば、鉄だろうが黄金だろうが口にしたモノはどんなに硬くてもバリバリと喰えて、喰えばどんなに毒性の強い物でも俺にとっては無害なモノに再構築できて、そして喰えば喰ったモノが持っていた何かしらの能力やパワーを一定の確率で得られるって能力だ。

どういった原理が働いているかは俺自身にも分かっていない。まったくの原理不明である。

まあ、そういった能力という事で納得しておいて欲しい。超能力の原理を問う事なんてナンセンスだ。

ちなみに、能力とかを得るためには何でもかんでも喰えばいい、というモノでも無い。喰う物にもどうやら条件があるらしく、生物の場合は鮮度が重要になってくる。死んでから最大十二時間後まで。それが生物を喰った場合に何かしらの得られるタイムリミットである。

あとは同じモノを喰えば喰うほど何かしらの能力を得やすくなるし、脳や心臓など、獲物のパワーが集中している部位を喰えばより確率は上がり、既に獲得した能力を強化する事が可能だ。

それに特殊な能力だけでなく、りよりよく膂力や治癒力や生命力など身体的な部分も強化もでき、俺より強い生物を喰えばほぼ間違いなくそれが持つ能力を獲得できる。

つまり【アブソリュート吸喰能力】は単体で見ればそこまで強い能力ではないが、喰えば喰うほど強くなっていく事が可能なのだ。

まあ、そんな能力に目覚めた転生前の俺は能力を強化する為に、災害指定生物——竜巻や地震といった自然災害と同一視されるほど危険な生物——を殺して喰らい、ESP能力を犯罪に使用していた悪者を捕まえて肉体の一部を“拝借する”事で多くの能力を持っていた。

ちなみに霧壺を放置したらどうなるかを知った【フューチャー未来予知】もその一つだった。

しかし残念な事に、それらは全部リセットされている。生き残るのにかなり便利な能力が幾つもあったので、リセットされたのは惜しい。

だが【アブソリュート吸喰能力】があるだけで十分過ぎるほど幸運だったと思うし、食人などの経験——初めて人肉を喰った時に何とも思わなかったので調べた結果、【吸喰能力】は忌避感などを麻痺させる作用もあるらしい——があつたからこそ今もこうして平然と謎の虫やホーンラビットを何の躊躇もなく生で喰って生きながらえているのだから、リセットされたのは悔しいが取り返す事が可能な事ではない。

生きる上で喰う事はとても重要な事なので、常識とか倫理とかこの際無視する。

それで今回喰ったホーンラビットから得られた能力【脱兎】。これはどうやら逃走行為を取ると、逃げ足上昇に逃走確率上昇、環境適応能力上昇などのボーナスが発生するアビリティらしい。

なぜホーンラビットはこんなアビリティを持っているのに、逃げずに俺達に真っ向から突っ込んできたんだらうと首を傾げながら、その後二匹のホーンラビットをとっ捕まえて喰らう事に成功する。

腹が膨れて気分良く寝た。あとゴブ吉くんの俺に対する信頼度が急上昇中の中である。

弱肉強食の自然界で、ゴブ吉くんが俺を自分よりも上の存在だと認識しているからだろう。

《六日目》

どうやら普通の生まれたばかりのゴブリンは、ホーンラビットにすら負ける弱者であるらしい。いや、今日まで木の実を主食にして生き延びていた——と言ってもまだ日はそんなに経っていないけど——ゴブ美ちゃんがそう教えてくれたのだ。

ゴブ美ちゃん、と名前に美がついてるけど決して綺麗では無いので悪しからず。他のゴブリンと同じ醜悪な面デスよ、ほんのちよつとはマシですがそれほど大差は無し、という以前にそもそも今の俺では大雑把な区別しかできないし。

俺？ 俺も似たようなもんだ。近くの川で身体洗うついでに確認しました。

ゴブ美ちゃんによると他のゴブリンとは比べ物にならないほど美形らしいけど、比べてるモノがモノだし、正直『ゴブリンにモテてもなあー』とは思えない。それにゴブリンのイケメンって言われても素直に喜べない、ゴブリンのイケメンってなんだよ。

ちよつと遠い目をしてみて精神を落ちつける。

あ、ゴブ吉くんは平凡クラスらしいです、良かったね。

話を戻すが、生まれたばかりのゴブリンは基本的に弱く、だからこそココでは生まれつき他よりも強い個体や運がいい個体、知恵がある個体だけが生き残るようになっていっているらしい。

選別してる訳ですね、本当の仲間になれる程度の能力がある者だけが生き残る様に。本当に世知

辛い。で、ゴブ美ちゃんによると、既に何人——正確には、何ゴブ？ だって人じゃないしなあ——かがホーンラビットの角の犠牲になっているとかなんとか。

正直その話を聞いて、『えーマジかよ』と思った。というか口に出てたけど。

だってさ、ホーンラビット（平均サイズ）って本当に野兎をちよつと大きくした程度のサイズなんだよ。それに体長はともかくとして、二足歩行を生かして頭上から攻撃できるゴブリンが逆に殺されて喰われるとか……ああ、有りうるか。

だって他の奴ら、木の棒を使うとかって知能すらなかったのだ。殴る蹴るの暴行が一般的だったほど。素手で立ち向かえば、そら確かに殺されるかもしれない。ホーンラビットは額に角という武器を持っている。馬鹿が無手で真正面はきついか。

それにもしたらホーンラビットの方が小さいというのも原因の一つかもしれない。下から腹部を角でグサッと決るに違いない。

ただ最近では俺とゴブ吉くんの真似して木の棒を装備した、ちよつとは聡いゴブリンもチラホラと見かけるようになってるのだが。

その日は情報を教えてもらったお礼にゴブ美ちゃんを加えた三人でハンティング。

ホーンラビットマジウマー。

《七日目》

今日は雨だったので、巣穴の洞窟でまったりと作業中。

カッソカッソと音を響かせながら、昨日河原で見つけた黒曜石の様な謎の鉱石にそこから拾った大きな石を打ちつけて研磨中。

先人に倣^{なま}って、解体用のナイフモドキの製作である。

いや、そろそろ毛皮で服が欲しいかなあーと。初期装備品である腰に巻いたボロ布から卒業したいが、角じゃ切るのに適してない。ならば皮を得る為にナイフを、という事だ。

研磨する音が五月蠅^{うるさ}いのか、それとも興味を引かれるのか、細かい事情は知らないし興味もないが、作業していると同時期に生まれたゴ布林達が近づいてきた。

何やら聞きたそうにしていたが、俺が無視し続けると大半が散っていった。邪魔だからよし。

年上のゴ布林達からは何故か微笑ましいモノを見る視線を向けられる。訳が分からん。

ナイフモドキも昼を少し過ぎた位で三本も製造する事ができたので今日はよしとしておく。というか、両手がちよつと痛くなっていたからだが。

しかしナイフモドキを作るのを止めた途端暇になってしまったので、今度は俺の作業の様子を飽きることなくジッと見ていたゴブ吉くんとゴブ美ちゃんの二人——いや、次からは人ではなくゴブで数えよう——を近くに呼んで、ハンティング時のフォーメーションについての作戦会議を開いた。

あーだこーだとそれぞれの意見を飛ばし——殆ど俺の独壇場だったが、ゴブ吉くんよりもゴブ美ちゃんの方が頭がよくて偶に意見を出している。ゴブ吉くんはうんうんとただ頷くだけで、莫迦なまこだから——っていると、そこに一際皺しわくちななゴ布林が近寄って来た。

このゴ布林こそゴブ爺じいである。この【小鬼の集落】内最高齢のゴ布林で、ご意見番みたいな地位についていて、そして何より、俺にゴブ朗と名付けたゴ布林の爺さんだ。

作戦会議は一旦止め、今度はゴブ爺に色々話を聞く。いや、ゴブ爺は無駄に長生きなだけはあるて物知りなので、こう言った機会は逃したくない。情報収集は大切だ。

まあ、二十年と少しを生きただけで老人と呼ばれるようになるのだから、この身体もそう長生きできないらしいけど……。ハハハ。

気を取り直して。

ゴブ爺にはこの世界の事とか、レベルや【存在進化】の法則——いや、なんかそんなものがあるらしいよこの世界——とか、何故この洞窟には俺達のように生まれたてのゴ布林と、ゴブ爺のようにとまどいれないがそれなりに高齢なゴ布林しかいないのか、などを教えてもらった。

この世界の話やレベルや存在進化などは追々語るだろうから今は置いて、まずはこの洞窟に住むゴ布林の話をしよう。

どうやら若い衆——俺達の親に当たるかもしれないゴ布林達——は森の外に出稼ぎに出ているそうだ。出稼ぎってつまりは略奪ですね分かります。

え、ホーンラビット程度に殺される程ゴブリンは弱いんじゃないかって？ いやいや、それは産まれたてのゴブリンが、である。

確かにゴブリンは種族として弱者だが、だからこそこの森で産まれたゴブリンは動けるようになった次の日から自活するように馴^なけられて、今の俺のように自給自足していく過程で木の棒を使ったり石を投げたりなどし、生きる術と悪知恵を文字通り命がけで習得していくらしい。

弱いモノは死に、強いモノだけが生き残るってシンプルかつ厳しい自然の掟ですね分かります。ホント容赦なくて泣いた。

ただ今回は早々にバディー組んだり木の棒を使用してホーンラビットを初っ端から狩っていた俺達を模倣する輩が多かったので、生き残る個体数は他の世代よりも多くなるだろう、との事。

ナルホドナーと頷きつつ、そんな歳になってもゴブリンと言う種は子孫を残す為なのかアッチの方は衰え知らず——死期が近いからかもしれないが——らしく、なんだかゴブ爺の腰布の形が変化したのを確認してしまった。

オエっと吐きそうになったが、無理やりに話を打ち切って早々に視線を逸らす。見続けられるかあんなもん。

その後話を終えたゴブ爺はホクホク顔で滾^{たぎ}る欲望を発散するべく、洞窟の奥に向かっていた。しばらくして、特徴的な粘着音とか細く弱々しい悲鳴が聞こえた。

捕まえられた女性達に『南無』と再度合掌して祈りを捧げる。繰り返すが今の俺では助け出すの

は無理なので、いつか楽にしてやりたいものだ。流石に、あの様子では生きている事こそが酷だろう。それくらいの情けは俺にだってある。

《八日目》

俺とゴブ吉くんとゴブ美ちゃんのトリオでハンティングに出かけた。

それにしても、数日の狩りで武装——と言っているのか分からない程粗末なモノだが——はかなり充実してきた。

俺は幾つかあるホーンラビットの角の中から特に大きいモノを二つ選び、片手に一つずつ持つ、二刀流ならぬ二角流。そしてもしもの時の為の保険として残りの角は森に生えている頑丈な蔦^{つた}を使って括^{くく}りつけ、隙間だらけの簡単な胴鎧として装備。角は案外硬いので、突きなど一点突破系の攻撃を防ぐのは難しくても、打撃などに対しては効果を發揮してくれる。保険としては十分だと思われる。

ゴブ吉くんは自分の胴体程の太さがある木の棍棒と木の胴鎧を装備している。木の棍棒はそのままだと流石に太すぎて両手でも持てなかったもので、持ち手を角でガリガリと削る事で細くしてあげている。ゴブ吉くんは三ゴブの中で一番の力持ちで莫迦だから、何も考えずに鈍器でただひたすら殴るといふスタイルが最適だったりする。

ゴブ美ちゃんにはホーンラビットの皮の切れ端と頑丈な蔦で造っていたスタッフ・スリング——

スリング
投石器に柄を取り付けて射程距離を強化したモノ——を持たせてみた。そこらに転がっている石を弾にして、鳥などに対して遠距離から攻撃できる後衛スタイルだ。胴鎧は今回作れなかったが、今後素材と時間があれば造ってあげようと思っている。

ちなみに三ゴブともにボロい腰布は標準装備です。新しい服が欲しいです。

しかしうん、やっぱり人数が増えると楽だ。

近接前衛^{フオワード}のゴブ吉くん、中距離型^{ミッドレンジ}の俺、後方支援^{バックアップ}のゴブ美ちゃんのフォーメーションは効率良く機能し、今日の戦果にはホーンラビットの他に新しい獲物も得られた。

体長六〇センチ、直径六センチ程の体躯をし、黒い鱗に斑模様が特徴的な毒蛇 “ナイトバイパー” が三体。

七色の色彩を持つ翼という目立って仕方が無い、蝙蝠^{こうもり}に似ているが恐らくは別の生物だろう “ナイロコウモリ” を一体。

狸とアルマジロを足したかのような、背部が硬い甲殻で覆われて硬い守りを見せた “ヨロイタヌキ” を二体。

そして定番になってきたホーンラビットは今回二体。文句なしの成果だった。

しかしそれにしても、ジュールジュールと涎^{よだれ}を垂らしながらつぶらな瞳を向けてくるゴブ吉くとゴブ美ちゃんはどうかしろと言いたい。いや、その気持ちは分かるが。

他のゴブリンのように得た獲物をその場で喰うのではなく、使える部位は武装に流用したいという俺の方針で解体作業が入るため、普通のゴブリンの食事よりも一手間も二手間も多くなっている。

それに解体する時は纏^{まと}めてやるので、ハンティング中は基本的に栄養補給^{栄養補給}をあまりしていない。だから腹が減っているのは分かるのだ。

でも俺はそれを黙殺し、作業に移った。ガクリとうな垂れる気配を感じる。はあ、仕方ない。

何時ものようにホーンラビットの角を折り、角を手に入れてからその肉体は先にゴブ吉くとゴブ美ちゃんに投げ渡す。本当はホーンラビットの温かそうな毛皮が欲しかったが、涎^{よだれ}たらしながら健気に待つゴブ吉くとゴブ美ちゃんの姿はあまりにも不憫だったのだ。

しかしゴブ吉くとゴブ美ちゃんは何故かそれを受け取りながら、キョトンとし、小首を傾げている……ああ、喰うなど言っていたのに角無しホーンラビットを渡されたから、不思議がっているのかと気付いて、今度は声に出して言った。

『少し時間が掛かるから先に喰え』と。

しばらく悩んだ後、ゴブ吉くとゴブ美ちゃんはガツガツムシヤムシヤと肉を咀嚼^{そしゃく}する。血液が二ゴブの口周りを赤く汚していく。その姿に食欲が刺激された。

我慢しながら視線を外し、俺はまずヨロイタヌキの甲殻を剥がしにかかった。ホーンラビットの角を使っても突き破れなかった硬い甲殻は、鎧の素材として使うのに申し分ない。

ココで昨日製作した黒曜石のような鉱石で造ったナイフモドキがさっそく役に立った。切れ味は抜群、とまではいかないものの、角よりは断然楽に解体できた。解体して分かった事だが、どうやらヨロイタヌキの甲殻は皮膚の一部が硬化した結果のモノであるらしく、一体分の甲殻を剥がすのなら全身の毛皮も丸ごと剥いだ方が楽で綺麗に解体できるようである。

少々苦戦しながら全身の毛皮と甲殻を剥がし終えると、再び謎アナウンスが聞こえた。

「ゴブ朗は『甲殻獣の皮付き甲殻』を手に入れた!!」

何だこれとはアナウンスを聞く度に思う。が、害は無いのだからまあいいかと放置。

まだ残りがあるので俺も作業の合間に栄養補給するべく、ヨロイタヌキの心臓と脳、それと右足を千切ってバリバリ喰う。他の部位はゴブ吉くとゴブ美ちゃんにあげた。まだ肉は有る。

それにしてもヨロイタヌキの肉うめー。コリコリとした歯応えあって、噛めば噛むほど旨味が出てくるようだ。あ、ちよつとだけ甲殻も齧^{かじ}ってみよう。

「能力【甲殻防御】のラーニング完了」

ちよつと甲殻を齧^{かじ}ったら新しいアビリティをラーニングできた。先に心臓と脳、それと右足を食

べたのが良かったのかもしれない。

ちなみに【甲殻防御】は生物の甲殻で出来たモノで防御すれば防御力上昇に防御確率上昇、致死攻撃妨害確率上昇って効果が発揮される。うん、なかなかいいアビリティだ。使い勝手が結構いい。気分が良くなり、やり方も分かったので先ほどよりも短い時間でもう一体のヨロイタヌキを解体し終えた。以前の職場で生物を解体する事には慣れているので、コツさえ掴めば早いモノだ。

今度は半分くらい肉を食べ、残りをゴブ吉くとゴブ美ちゃん達に投げ渡し、もう一度甲殻をちよつと齧^{かじ}って【甲殻防御】のアビリティレベルを上げておく。

アビリティレベル、と言っても明確な表示は無く、分かり易くレベルって言ったただだから特に意味は無い。アビリティの効果がさっきよりも多少強くなった、と思っておけば十分だろう。

次はナナイロコウモリの解体に移る。七色の綺麗な翼を根元から切り離し、血を吸う機能が有りそうな牙を引っかく。後は取りあえず皆で肉を分けて食べた。

ナナイロコウモリの肉は歯応えのあったヨロイタヌキの肉とは違って非常に柔らかく、これはこれで、美味である。というよりも、ゴブリンになってから喰う獲物全部美味いんだけど。種族的な味覚がそうになってんのかねえ？ 詳しい事はどうでもいいが、少しだけ気になった。

ただ残念ながらナナイロコウモリの能力はラーニングできなかったが、身体能力はちよつとだけ強化できたらしいと、肉を喰って感じた身体の充実感が判断する。

ESP能力【吸喰能力^{アブキリシヨウ}】は【甲殻防御^{アビリティ}】などと言った能力だけでなく、臂力とか防御力とか生命

力と言った身体も強化してくれるので本当に有り難い。

……それにしても、ESP能力って魂由来の能力なのか？　どこかの高名な学者様の論文では『特殊ウイルスに感染し、適合した者が能力を発症する』とか言っていたような、そうでないようなと小首を傾げるが真偽を確かめる術が無いので、益の無い思考は一旦放棄。

最後に今回のメインディッシュ、三体のナイトバイパーの解体に取り掛かる。

取りあえず黒曜石のような鉱石で造ったナイフモドキで首を切り落とそうとしたが、蛇皮がやけに硬くて一本は刃が欠けてしまった。また削り直したとうな垂れつつ、何かに使えるなと思った蛇皮をビリビリと引き剥がす。頭部を切り落として皮を剥いだ胴体は、一ゴブにつき一匹と丁度良かった。

ガブリと喰った。かなり美味かった。

うん、これは焼いて酒をぶっかけたらそれはもう絶品だろうな、と一口目から思うほどに美味かった。今も想像しただけで唾が溢れそうになる、それくらい印象深い食材である。

ホーンラビットやヨロイタヌキのコリコリっとちよつと硬めの肉も美味かったし、ナナイロコウモリの柔い肉も美味い。だが、ナイトバイパーの肉はそれらを軽く上回る。その美味さに思わず作業の手が止まってしまい、三ゴブ揃ってガツガツと肉を喰い漁る事になった。

【能力名【サイモグラファイ赤外線感知】のラーニング完了】

【能力名【ヴェム蛇毒投与】のラーニング完了】

【能力名【トランスヴェナム猛毒耐性】のラーニング完了】

【能力名【イグナルアイ気配察知】のラーニング完了】

【能力名【スカルアイ蛇の魔眼】のラーニング完了】

喰い終わると、五つのアビリティを習得できてしまった。

どうやらナイトバイパーは今の俺よりも格段に格が上だったらしい。これは【デインジ吸喰能力】が自分よりも強いモノを喰えば何かを得られる確率が非常に高くなる性質上、まず間違いないだろう。

それに一度の食事で一気に五つもアビリティを得られたのは中々ない経験だった。人間だった前世よりもゴブリンが弱い種族だからかね、と推測してみる。

いや、それにしても今日は満足いく成果になった。まだ残っている毒牙は道具として使ってもいいのだが、今獲得した毒に対する対抗手段とも言える【猛毒耐性猛毒耐性】がないゴブ吉くんはゴブ美ちゃんでは、掠っただけで瀕死になってしまいうに違いない。最悪即死だ。

それに俺が今回得たアビリティ【蛇毒投与蛇毒投与】は、(俺愛用の角のように)尖った部位を持つ物の先端からある程度意図した性質の毒を分泌できるようになるモノである。触れていないとこのアビリティは發揮されないが、この毒牙を使うよりも遥かに使い勝手がいいし、安全管理も非常に楽だ。

なので事故が起きないように、今回は切り落とした三つの首は俺がポリポリと喰う。
うん、ナイトバイパーの毒——【猛毒耐性】と【吸喰能力】の両方で完全に無害化されている——
のポリポリとした刺激がより一層美味である。

しかし、羨ましそうな視線を向けるなニゴブとも。これ、君等が食べれば死んじゃうよ？

《九日目》

今日は雨だった。土砂降りである。

外には出たくないのので昨日獲得した素材を使い、新武器の製作に勤しむ。

昨日の帰り路に、以前ゴブ爺に教えてもらった近くで採取できる針のような【鋼刺草】と、頑丈な紐のような【細蔦】は既に確保済みなので、ヨロイタヌキの皮付き甲殻とナイトバイパーの皮をチクチクと裁縫していく。

最初に造ったのは俺の胴鎧だ。ここでヨロイタヌキの甲殻を前後に使用しても良かったのだが、取りあえず今回は背面を甲殻でガッチリと守り、前面はこれまで背面に使っていた分のホーンラビットの角を使う事で隙間を殆ど無くす事ができた。

これでやっとボロい腰布から服装がランクアップできた気がする。

以前の胴鎧？ いや、あれ蔦で角を括りつけただけだから服とは認められない。それにボロい腰布はデフォで装備してたし。

次いで木で正方形を拵えて、残った一体分の甲殻をつけてみた。まだまだみすばらしいが、これで頑丈な盾の完成だ。これはゴブ吉くんにプレゼント。

俺は盾を使わない二角流だし、この盾は俺が使うには少々大きすぎる。だから前衛のゴブ吉くんが持つべきだろう。それに最近では片手で棍棒振り回せるようになってきたので、片手を空いたままにするのは勿体ない。

盾を渡したら、大層喜んでくれた。自分の胴体と同じ太さの棍棒と、ヨロイタヌキの甲殻で造った盾と木の胴鎧を装備したゴブ吉くん。うん、なかなか様に成っている。

次はゴブ美ちゃんの胴鎧だ。使用したのは残っていた蛇皮とナナイロコウモリの翼、それと余った角を少々。それらをチクチクと縫い合わせていくと、何だか民族衣装的な胴鎧が完成。

ナナイロコウモリの翼を使っているので色鮮やかだが、案外翼膜は丈夫らしく弾力性がある。ホーンラビットの角はゴブリンの急所を護る様に配置しているので、最低限度の防御効果は期待できる。あとナナイロコウモリの牙で首飾りを造ってみた。いや、ちょっとゴブ美ちゃんだけ少な過ぎる様な気がしたからオマケしたのだ。コッチも大変喜んでくれました。

そうだな、今度造るのは俺は武器、ゴブ吉くんは防具、ゴブ美ちゃんは弓などがいいるうな。

本日の食事は赤ん坊時代——と言っても数日前だけ——に食べていた、芋虫みたいな奴だった。これ、洞窟で獲れるらしいです。喰ってみると案外美味いので、この虫も侮れない。

ラーニングはできないけどさ。